



なばり

2021年(令和3年) 2月10日発行

主 内容

- 1~2...名張ゆめづくり協働塾 3...消防白書
- 4...ごみ処理中の火災多発 7...施設ガイド 8...3月の相談

△ 催しへの参加は、マスク着用など感染防止にご協力ください(催しは中止・延期の場合あり)

発行/名張市秘書広報室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1 ☎0595-63-7402 FAX 0595-64-2560 ✉pr@city.nabari.mie.jp

名張ゆめづくり協働塾・
地域づくりシンポジウム
基調講演より

2020年以降、地域を支える世代が急激に減少 地域づくりは、いま、まさに ターニングポイントを迎えています



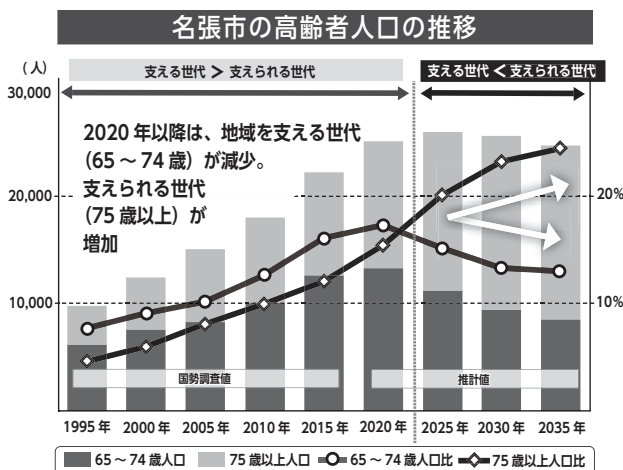
講師 齋藤 主税 さん

NPO法人 都岐沙羅/パートナーズセンター理事・事務局長。新潟県村上地域で、住民活動やコミュニティビジネス支援のほか、地域づくり事業のコーディネートなどを行いながら、持続可能な地域社会の仕組みづくりに取り組んでいる。



地域づくりのあり方を考える「名張ゆめづくり協働塾・地域づくりシンポジウム」(主催:市・一般財団法人自治総合センター)が1月16日、防災センターで開催され、地域づくり組織の関係者など約40人が参加。基調講演「withコロナ社会で問われる地域の自治力」と「これからの地域づくり」を考えるパネルディスカッションが行われました。今号では、その要旨をご紹介します。

☎ 地域経営室 ☎ 63-7484



人が減っていくことを前提に地域づくりを行う時代

私は、新潟県の村上地域で、コミュニティビジネスの育成などに取り組んできました。着実に地域が元気になっていくという実感がある一方で、年々高齢化率は上がり、年少人口は減っているのです。日本では、2008年に人口のピークを迎え、人口減少が続いています。仮に明日から人口規模を維持できるような出生率になったとしても、年少人口の割合が高かった昭和40年ごろの人口構成に戻るには、50年以上かかる。少子化対策に即効性はないのです。ということは、人が減っていくことを前提に地域づくりを行っていく

なければならぬ。そして、暮らしに大きく影響するのが、人口構成の変化です。

65歳以上の人はひとくくりに「高齢者」と呼ばれますが、今、地域を支えているのは74歳までの前期高齢者。75歳を超えて、後期高齢者になってくると、できないことも増えてくる。85歳以上だと、4人に1人が要介護3以上というデータもあります。

高齢化の第二幕到来。支え手が支えられる側に

名張市では、2020年以降、高齢化の第二幕が到来。後期高齢者数が前期高齢者数を超え、その差が大きく開いていく、まさにターニングポイントです。高齢者のみの世帯も増加していきます。すると、地域では、通院や買い物、草刈り、お墓の管理に至るまで、暮らしのさまざまなことができない人が増えていく。支え手が支えられる側になっていくのですから、これからの地域づくりは、今までの延長ではなく、進化していく必要があります。

行政に頼ろうとしても、少子化によって税収は減少。高齢化によって社会保障費は増加。さらに、道路や橋、建物などの社会的インフラも徐々に耐用年数を迎えていくため、更新にかかる支出も増加。行政にお願いして何とかしてくれるような状況は考えられませんよね。

ここで言いたいのは、余力があるうちから、自分たちでできることを増やしていきたいということ。

【2ページへ続く】



「名張ゆめづくり協働塾・地域づくりシンポジウム」の講演資料などは、市ホームページに掲載しています。本記事と合わせてご覧ください。

やり方は昭和のまま？ 今までの「当たり前」を 見直そう

担い手不足は旧態依然とした イベントや役員選考が原因？



何気ない「つばやき」にヒントが

地域を支えている役員世代は、後継者がいない、若い人が参加しないと言います。これは、全国的な傾向です。でも、イベントや役員選考などのやり方は旧態依然、昭和のままという地域が多い。

一方で、「地域活動に興味がある」と答える若者が多いといったデータもあります。本気で変わろうとしている地域では、若者も一緒に活動しています。

まずは、行事や会議の「棚卸し」をして、地域活動の全体量を把握することから始めてみては。そして、「ついでにやれる」「まとめてやれる」ことはないか探してみる。例えば、敬老会と趣味の作品展を合同開催したところ、来場者を集めるのに苦労していた作品展が大盛況になった事例や、交通安全関係の組織を統合して会議を半減させるなど、負担を減少させながら、交通安全の取組は残せたという事例があります。継承すべきなのは組織ではなく、機能。担い手が限られる中、これまで通りではなく、発想の転換が求められます。

会議って案外アイデアが出てくもの。何気ない会話やつばやきの中に地域づくりのヒントがあるものです。

例えば、高齢者サロンで「最近包丁が切れなくて、料理が億劫になってきた」というお年寄りのつぶやきを耳にして、「料理ができなくなると、食生活が乱れる。そのうち、体調を崩し、要介護となるお年寄りが増えるのでは」と考えた人がいた。まずは一人で、1時間だけ包丁を研ぐ場を設けたところ、なんと100本も包丁が集まってしまった。それから、対応人数を増やし、機械も導入して、包丁研ぎが事業化されました。

最初は妄想であっていい。それを元に構想を練って、とにかくやってみる。人に説明しても伝わらないことも、活動を見せることで「これだ」と思ってもらえることも多い。何が正解か見えないコロナ禍の時代、立ち止まるのではなく、歩きながら考える。そして、次につなげていくことが大切だと思えます。

民生委員児童委員が地域の多様な活動へ

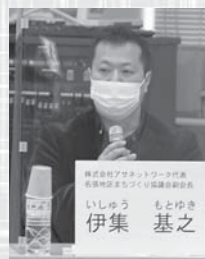
従来より赤目まちづくり委員会の福祉部にのみ所属していた民生委員児童委員が、昨年度からは、各部会に分散して参加することになりました。これにより、民生委員児童委員が、地域福祉の担い手としてまちづくり活動全般に関わって、様々な情報を共有できるようになりました。また、カレーを提供する高齢者向けサロンの開催日を土曜日に変更することで、「こども食堂」として世代間交流を目的とした新たな居場所づくりになるよう進めているところです。



藤村 純子さん
(民生委員児童委員協議会連合会会長/
赤目まちづくり委員会)

地域で若者がチャレンジできる場を

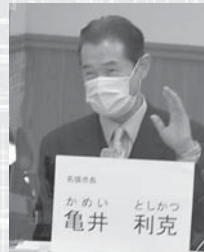
名張学園祭というイベントを昨年初開催。若者に企画から携わってもらいました。声をかけた大学生は「やりたいと思っていても、まちづくりに関わるチャンスはなかった」と話します。私自身、まちづくり協議会でさまざまなチャレンジをさせていただきましたが、前例はなくても、形にできたからこそ、次はこうしたいという発想が生まれます。今後は、各地域の皆さんとつながりながら市全体を盛り上げていく場が作れないか。そんなことも考えています。



伊集 基之さん
(名張地区まちづくり協議会)

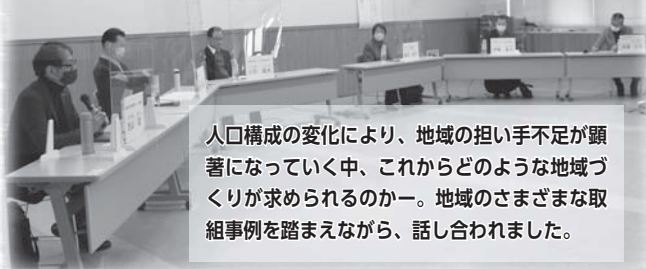
互助共生のまちへ導く「リンクワーカー」の養成を

地域共生社会を目指して取り組んでいる名張市は、地域の皆さんによる知恵と工夫でその深化発展が成っているわけです。いま新たな担い手として、困りごとのある人を専門機関や各種団体、地域社会につないで解決を図っていく「リンクワーカー」の養成も進めているところです。今後も、地域の皆さんと連携して取り組んでいきたいと考えています。



亀井 利克(名張市長)

パネルディスカッション これからの地域づくり



人口構成の変化により、地域の担い手不足が顕著になっていく中、これからどのような地域づくりが求められるのか。地域のさまざまな取組事例を踏まえながら、話し合われました。

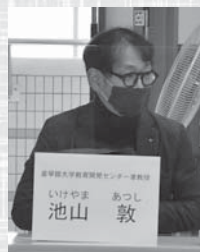
子どもを主役に据えた地域づくりに



小引 福夫さん
(名張市地域づくり代表者協議会会長/つつじが丘・春日丘自治協議会)

小中学生とともに地域の将来を考える場「つつじ子会議」が発足したのは、「子どもが主役の活動なら私たちも参加しやすい」という保護者の雑談がきっかけ。親世代にも地域づくりに関わってもらおう機会となっています。この「つつじ子会議」では、地域のマスコットキャラクターが考案されましたが、いろんな場面で活用していくことで、子どもたち自身が、自分たちも地域でできることがあるんだと感じられるようにしていきたいですね。

不確実な時代だからこそ、一歩踏み出そう



コーディネーター 池山 敦さん(皇學館大学准教授)

皆さんのお話を聞かせていただくと、新型コロナウイルスや超高齢社会など、不確実な時代だからこそ、考えてばかりしないで、とにかく一歩踏み出して取り組んでみるのが大切だと感じます。そして、一人、また1地区の力だけでなく、連携の力によって地域課題を解決していくことが求められているのだと思います。